

2020 年度『映画シンポジウム：アジアを知る』

イベント名：「ナディアの誓い On Her Shoulders」

日 時：2021 年 2 月 20 日（土）14:00～17:00

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

登壇者：司会／趣旨説明（後藤 絵美・東京大学）、映画紹介（濱中麻梨菜・東京大学大学院）、パネルディスカッション（鳥山純子・立命館大学、岡真理・京都大学、小手川 正二郎・國學院大学）

後藤：みなさん、こんにちは。本日は映画シンポジウム「アジアを知る：ナディアの誓い」にご参加くださいましてありがとうございます。司会と趣旨説明担当の後藤絵美と申します。これから三時間の長丁場となりますが、どうぞよろしくお願ひいたします。

「アジアを知る」は、映画を題材に、アジアの多様な地域やそこに暮らす人々のことを知り、また、それをきっかけとして自分自身のことを改めて「知る」という二つの目的をもった企画です。これは、東京大学日本・アジアに関する教育ネットワーク（通称ASNET）によって2013年10月に始まりました。

「アジアを知る」の枠で取り上げた映画を、こちらのスライドに挙げてみました。

これまでの「アジアを知る」

- 2013年10月 3日（木）『オトコと鳩 ManDove』（2012年、インドネシア）
- 2016年 1月26日（火）『678』（2010年、エジプト）
- 2016年 7月22日（金）『白い天使』（2007年、トルコ）
- 2017年 7月30日（日）『辛口ソースのハンスー丁』（2013年、ドイツ）
- 2017年12月 6日（水）『離散の旅』（2015年、パレスティナ、シリア、レバノン、アメリカ）
- 2018年 3月26日（月）『ラッカは静かに虐殺されている』（2017年、アメリカ）
- 2019年 2月 8日（金）『この地にわが墓所あり』（2014年、レバノン、フランス、カタール、UAE）
- 2019年10月17日（木）『真昼の星』（1988年、シリア）
- 2020年 1月28日（火）『ガイサンシーとその姉妹たち』（2007年、中国、日本）
- 2020年 2月20日（木）『女らしさ Mohtarama』（2015年、アフガニスタン）
- 2020年11月28日（土）『女を修理する男』（2015年、オランダ）
- 2021年 2月20日（土）『ナディアの誓い』（2018年、アメリカ）

最初のインドネシアのドキュメンタリー映画『オトコと鳩 ManDove』に始まり、さまざまなタイトルを上映し、その内容をきっかけに、たくさんのことを考え、議論してきました。

西アジア地域に関する映画が多いとお感じになる方もいるかもしれません。これは主催者の研究関心に加えて、共催者が、中東映画研究会や中東・イスラーム研究者が多く参加する科研であった、ということにも関係しています。

今回の「アジアを知る：ナディアの誓い」も、いつものメンバー、科研費新学術研究「グローバル秩

序の溶解と新しい危機を超えて：関係性中心の融合型人文社会科学の確立」いわゆる「グローバル関係学」科研、科研費基盤研究(A)イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究、いわゆるイスラーム・ジェンダー学科研、中東映画研究会、そして東京大学東洋文化研究所との共催となっております。また、映画の主題に深くかかわるテーマを扱う科研プロジェクト、基盤研究(A)トランクショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究が、今回加わっています。

先ほど申し上げました通り、「アジアを知る」という企画は、映画とその後の議論を通して、アジアの多様な地域や、そこで暮らす人々のことを知るという目的に加えて、その時間をきっかけに自分自身のことをふりかえるという目的をもっています。今日の映画は、イラクで武装組織に捉えられ、本当に大変な思いをした後、ドイツに移住した女性ナディアに関するドキュメンタリーです。彼女の話が、どのようにして皆さん「自身」とつながっていくのか。この点については、映画上映に続くシンポジウムに期待していただければと思います。

今日の流れをお伝えします。映画上映に先立ち、濱中麻梨菜さんに作品紹介をしていただきます。その後、95分間の映画上映となります。10分ほどの休憩をはさんで、パネルディスカッションに入ります。登壇者は濱中さんに加えて、鳥山純子さん、岡真理さん、小手川正二郎さんです。

それでは濱中麻梨菜さん、作品紹介をお願いします。濱中さんは現在、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究に所属されています。ご関心は、主にパレスチナ・シリアの「難民」をめぐるメディア表象と伺っています。では、どうぞよろしくお願ひいたします。

* * * * *

濱中：濱中と申します。よろしくお願ひします。作品について、簡単にお話しさせていただきます。まず、映画に登場するナディア・ムラドさんは、1993年生まれ、現在27歳のイラクのヤジーディー教徒で、2014年、イスラム国「IS」を名乗る集団に、当時暮らしていた村を占領されてしまいます。その際に肉親を殺され、自身もISの戦闘員の奴隸にされ、しかし、そこからなんとか逃れる、という経験をした方です。その後、自身と同胞が見舞われた苦難について広く証言活動を行い、2018年にノーベル平和賞を受賞されます。

今回上映する『ナディアの誓い』は、ISによる占領／大量虐殺を脱した後の、証言活動を行っているナディアさんに焦点を当てたドキュメンタリーです。彼女の行っている証言活動の、その証言の内容（具体的にどのような経験をされたのか、といったこと）については、映画の中では詳しく語られてはいません。映画で描かれるより前の出来事、すなわち、ナディアさん、ヤジーディーの人々に何が起きたのかが書かれているのが、ナディアさんの手記である『THE LAST GIRL』という本です。（これは今回の上映会に先立ち行われた、先日2021年2月9日の巣ごもり読書会で題材として取り上げられた本です）この『THE LAST GIRL』という本は、2014年に、当時暮らしていた村がISを名乗る集団に突然襲撃され、家族を殺され、他の女性とともに連れ去られ、奴隸・売買の対象とされ、ISの施設を転々とする、という壮絶な経験をした、ナディアさんの体験記が中心的内容となっています。

ここで、映画の監督について少しお話ししますと、本作品の監督・アレクサンドリア・ボンバッハ氏は、アメリカの映画製作者で、『ナディアの誓い』の制作前、2015年に、彼女の最初の長編ドキュメ

ン

タリー『FRAME BY FRAME』という作品を制作しています。この作品は、アフガニスタン初のフリープレスの立ち上げを試みた、4人のアフガニスタンのフォトジャーナリストを追ったものです。また、翌年2016年にもアフガニスタンでの仕事を続け、『アフガニスタン・バイ・チョイス』という作品の監督も務めています。



ALEXANDRIA BOMBACH
-DIRECTOR, CINEMATOGRAPHER, EDITOR

アメリカの映画製作。『ナディアの誓い』の制作前、2015年に、彼女の最初の長編ドキュメンタリー『FRAME BY FRAME』を制作している。この作品は、アフガニスタン初のフリープレスの立ち上げを試みた、4人のアフガニスタンのフォトジャーナリストを追ったもの。翌年2016年もアフガニスタンでの仕事を続け、『アフガニスタン・バイ・チョイス』という作品の監督も務めている。

<http://www.onhershouldersfilm.com/>

ひとまず事前の作品紹介はここまでとして、私からは以上になります。ありがとうございました。

* * * * *

後藤：濱中さん、ありがとうございました。もっと詳しく監督の意図などを調べてくださったので、また後半のパネルディスカッションでもしお時間があればお話しいただければと思います。

それでは上映に入りたいと思います。今回の映像は配給会社ユナイテッド・ピープルより許可をいただいて配信しております。お手元での録画、録音、撮影等、おやめくださいますようお願い申し上げます。また、より多くの皆さんにとって見えやすいよう、画質を下げてお届けすることにしました。その点、ご容赦・ご理解をお願いします。

* * * * *

『ナディアの誓い』 上映95分間

* * * * *

後藤：それではパネルディスカッションに入ります。今日は三人の方々にご登壇いただきます。今回の上映会の企画は「ジェンダー」「難民」「公正とは何か」などの比較的大きなテーマを考えておられる方々に集まつていただきました。

最初のパネラーは鳥山純子さん、立命館大学国際関係学部国際関係学科にお勤めです。ご専門はジェンダー論、中東ジェンダー研究、文化人類学。そしてイスラーム・ジェンダー学科研を牽引し、とくにジェンダー理論に関する部分について背負ってくださってきました。ライラ・アブーニルゴドの『ムスリム女性に救援は必要か』の翻訳者のお一人で、アブーニルゴドと同様、一筋縄ではいかない、鋭い議論を、日本の中で展開されてきました。それでは鳥山さん、ご準備よろしいでしょうか。よろしくお願ひします。

鳥山：ご紹介に預かりました鳥山純子と申します。よろしくお願ひします。先ほど後藤さんの紹介にもありました、イスラーム・ジェンダー学科研ではそもそも、そんなにジェンダーを専門にしている人間がたくさんいない中で活動してきたこと也有って、まるで私がジェンダーを背負っているような形で話をすることがありました。しかし、おそらく今日の聴衆の皆様の中には、私なんかよりもジェンダーについてずっと詳しい方がいらっしゃると思うので、そういう方には是非ディスカッションのほうも引っ張っていってほしいと思います。

そもそも、ナディア・ムラドは2016年に国連でスピーチをした頃に日本でも報道されて多くの関心が寄せられるようになりました。中東を地域としながらジェンダー理論を使って分析をする、という意味では、私なんかにとてはすぐに取り上げるべき相手・対象であったように感じつつも、当時私は積極的にナディア・ムラドさんについて知ろうとしたり授業で取り上げたりということはありませんでした。

ナディア・ムラドに寄せられた国際的な関心を考えるうえで重要なのは、戦時性暴力の問題ではないかと思います。当然、人身売買の問題や難民問題も重要だったわけですが、もしそれだけであれば一緒に活動しているヤズダのエグゼクティブディレクターのムラドさんのほうが場合によっては適したスピーカーだったかもしれない。それが、ここまでナディアという存在が取り上げられた背景には戦時性暴力の被害者の当事者としての存在が大きかったかと思います。2018年にノーベル平和賞を受賞しましたが、奇しくも、（というかおそらくは明確な意図のもとに）同年ノーベル平和書を受賞していたのはデニ・ムクウェゲさん（コンゴ内戦下とその後に性被害に遭った女性たちを医師として助けた、ASNET「アジアを知る」でもかつて取り上げた）でした。その背景には国連安保理決議1325とそこに連なる「女性・平和・安全保障」決議の存在が働いていたといえます。この安保理決議に至るまでの運動、それからこれが2000年に採択されていますので、その後のこの戦時性暴力の被害者、戦時性暴力を規制していくという動きの中ではその極致にあったという位置づけもできると思います。

この安保理決議1325の裏には90年代初頭から連なる脈々とした動きがありました。それまでは戦時下で行われていることがわかつていながら犯罪性として問うことができなかつた、女性に対するレイプや子供たちへの被害が、90年代初頭からそれまでの運動の積み重ねとして戦時下であろうがなかろうが犯罪であるということが明確に打ち出されました。ムクウェゲさんは紛争下の戦時性暴力を「人道に対する罪」としてノーベル平和賞のスピーチでも大きく示しました。

ここで、日本の状況についても言及してみます。日本は国連決議1325をナショナル・アクションプランとして2015年に出しています。が、その日本でさえ、そのアクションプランにおいては慰安婦問題・在日駐留米軍の性犯罪については取り上げられていません。このことはナディアさんを語るうえでも私たち日本語話者として知っておくべきかと思います。

国連決議1325につながる道として、かなり類似の道のりを1991年のキム・ハクスンさんの証言から始まって、慰安婦問題などを考えるうえでも辿っています。こういう時代の流れのなかで起こったこ

とであって、そこにナディア・ムラドさんという存在がいる、ということです。

本来であればこうしたジェンダー的な運動の評価として総括できるようなナディアさんの存在は、私（鳥山）がすぐに関心を持つべき存在の一人ではないかと思っています。しかし、なかなか私の中ではそう簡単にいかなかつたということがありました。その理由の一つとして、メディアでセンセーショナルに「ダーイシュ（IS）の性奴隸だった女性」という形で報道されたこと、それに対して「気持ち悪さ」を感じてしまったことがありました。ダーイシュの残虐性、あるいは性奴隸というエロチックな存在として括られる中東というものに対して、学術的に中東に取り組もうとしてきた人間としては、どうしてもオリエンタリズム的な括りというものを無視できなかつた、ということがあります。

この映画ではその部分を非常にうまく掬っていると感じました。この映画の主題の一つは、性奴隸の当事者としての語り部というナディア・ムラドさんが抱える、彼女の両肩（on her shoulders）にかかるその重責を取り上げています。はたしてその語り部という存在は誰にとっての存在なのか？ということを突き付ける映画であったと考えています。

私がこの映画を見て思ったのは、ナディアという一人の人間が「ダーイシュの性奴隸の被害者」という、国際社会に求められた枠組みに押し込められる姿、そこに憤りを感じました。それは、結局のところ私の都合のいいようにしかナディアを消費していないのではないかという思いにとらわれるからです。しかし同時に、「性暴力の被害者」という枠組みがあるからこそ日本で生きている私がこうしてナディアと出会うことができているわけです。そこには無視できないジェンダー的な、フェミニズム運動の積み重ねとしての取り組み、戦時性暴力の問題化・可視化というものがあります。そこにジレンマがあります。こうした取り組みがあつて問題化・可視化されるようになって枠組みが提供されることによって出てきた「ナディア」。だからこそ出会えている「ナディア」ですが、しかしやはりこの映画では「性暴力の被害者」「ダーイシュの暴力の被害者」「強制的に祖国を追われた被害者」という枠組みそのものによって置き換えられてその中でかき消されてしまうナディアの幸せや痛みがあるのではないか、ということがこの映画では存分に描かれているのだと思います。

枠組みとして用意されたナディアだけでなく、私は個人的に、人としてナディアに出会いたいと思っています。そこでどうしたら語られるナディアだけでなく語るナディアに出会えるのだろうかということを考えさせられた、ということを私からの問題提起としたいと思います。最後に、ナディアに出会える時に、私は一体どんな私でいられるのか、私は国際社会の一員として、あるいは京都在住の研究者として会いたいとは思っていません。人として彼女と出会えたとしたら、その時自分はどんな自分として出会いたいだろうかということもこの映画を通して考えさせられました。私からは以上です。

後藤：鳥山さん、ありがとうございました。「語られるナディア」というタイトルでしたが、「語るナディア」と出会いたい、その時のご自身の立ち位置、ということでした。また後ほど深めていきたいと思います。

続きまして岡真理さんに「『ナディアの誓い』をどう観るか」というタイトルでお話しいただきます。岡さんは、京都大学大学院人間・環境学研究科総合人間学部にお勤めです。科研プロジェクト「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」の代表者で、「祖国」——これはアラビア語で「ワタン」というのですが——このワタンと文学や思想を結ぶ研究を行っておられます。イスラーム・ジェンダー学科研では「記憶と記録にみる女性たちと百年」というپ

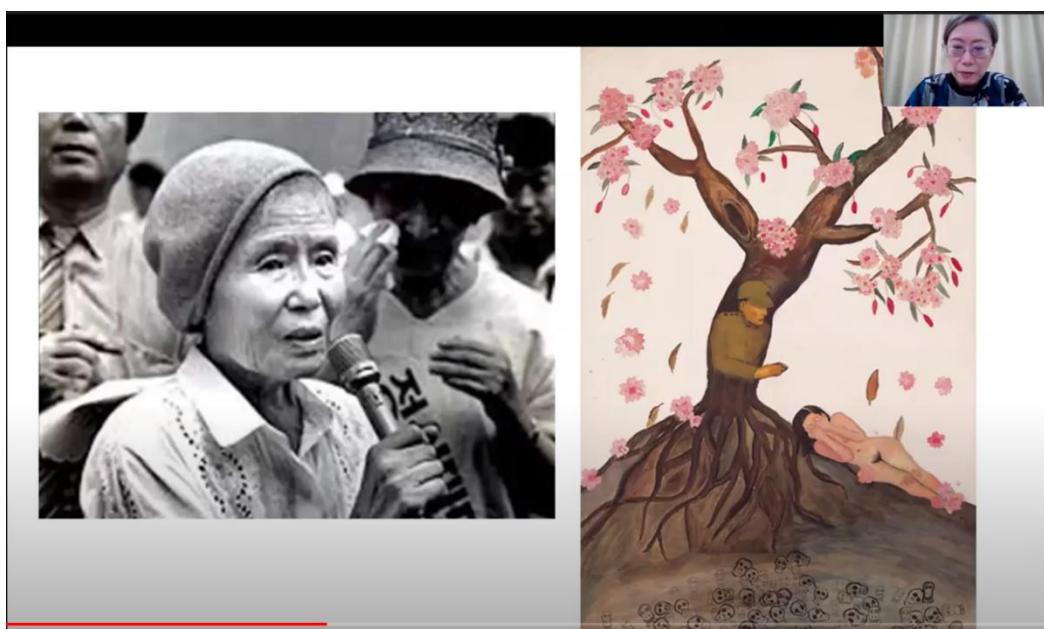
プロジェクトを先導されています。それでは岡さん、よろしくお願ひいたします。

岡: ご紹介ありがとうございます。私のほうからは、この「ナディアの誓い」という映画を私たちはどのような作品として観るのかということをお話させていただきます。私はナディアさんの手記『The Last Girl 私を最後にするために』を先に読んでいまして、この映画を見る前、この映画作品に関しては、(ナディア自身の証言活動を通じて『The Last Girl』で語られていたような) ISに捉えられどのような目に遭ったのかというようなことが語られていると思っていました。しかし実際には、それとはまったく違っていたわけです。実際に彼女が被ったことは描かれないで、むしろそれを聞き取ろう、何とか彼女に語らせようとするマスメディアの姿が描かれています。

今回はビョン・ヨンジュ監督『ナムの家』という映画とも比較しながら、『ナディアの誓い』について考えてみます。いずれも、かつて自らが被った暴力を「証言」する姿を描いた作品という共通点があります。これと対比させることで『ナディアの誓い』がどういった映画なのかがわかるのではないかと思います。ビョン・ヨンジュ監督『ナムの家』シリーズは1995年、97年、99年の全3部作です。今日はこの第1作目を取り上げます。

両作品の差異点としては、『ナムの家』の場合はソウル郊外にある「ナム」(朝鮮語で「分かち合い」の意味)の家に住む、元日本軍の性奴隸の被害女性たち、年を取ったハルモニたち複数名が登場するのに対して、『ナディア』の場合、証言活動を行うのはナディア一人です。そしてその時、ナディアは自身の「言葉」によって証言活動を行っているのに対して(アラビア語や英語、母語のクルド語など)、『ナム』のハルモニたちの証言は、原題が「低い声」であることからも分かるように、言葉にならない「声」(音声だけでなく、沈黙、ため息、表情なども含む)を通して自分たちがかつて被った記憶や苦しみを描こうとしていた、という点が挙げられるのではないかと思います。

こちらは第1作目で中心的な人物だったカン・ドッキョンさんですが、彼女はナムの家に入って絵を描くことを始めました。彼女は言葉というよりもむしろ絵画表現を通して証言を続けられました。



それ以外にも、ハルモニたちは過去の加害者である日本人、日本国家というものが忘却に付した暴力をあぶりだすわけです。この時に彼女たちは言葉にならない「声」を通じて、「自ら」が受けた性暴力の記憶 (personalな記憶) を蘇らせます。これに対して『ナディア』は、この映画の原題On her shoulders (彼女の双肩に) にあるように、彼女が「現在」背負っている苦難をあぶりだしています。しかもそれは彼女自身と同胞が受けた《多重の暴力》の記憶でもある、ということです。

ナディアが受けた暴力の多重性については、まず「性暴力」というところにみんなの関心が向かうわけですが、実際にはそれだけではありません。母親を殺され、男性親族もたくさん殺されました。また、共同体それ自体がジェノサイドに遭い、故郷それ自体が破壊されました。そしてヤジーディーの人々は依然として難民と化しています。つまり、これらはナディア個人が被った暴力であると同時に、同胞と共同体が今なお被り続けている現在進行形の暴力である、ということです。そして彼女は同胞・共同体の苦難の証言者となっているという点で『ナム』とは描いているものが異なっていることがわかります。まさにそれがOn her shouldersという英語の原題に込められていると思います。

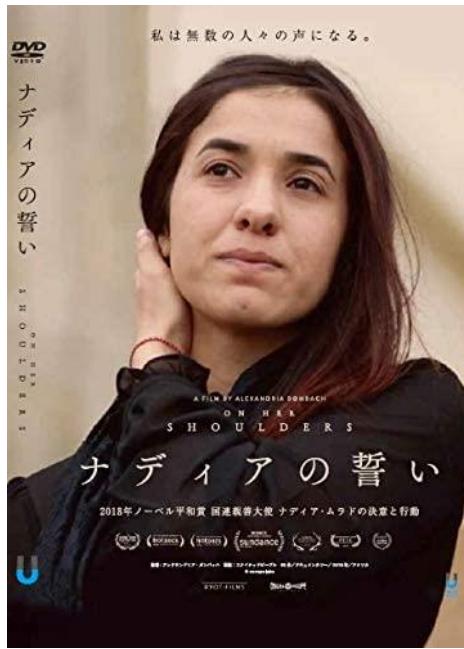
同時に、彼女が映画の中で（オフィシャルな場で）語っているのは、自分が被害に遭ったことを通じて今なおそういう状況に置かれている同胞たちの苦難を証言しています。この映画は彼女の語り、沈黙、表情などを通じて、同胞のために苦難の証言者となる責務を負ってしまった彼女の苦難の証言になっていると思います。つまりこの映画で描かれている証言は二重構造になっていて、一つは彼女が世界に向けて訴えかける同胞が被った苦難の証言と、もう一つはナディアの個人的な語りや沈黙、表情を通じて、こうした責務を負うことになったナディア自身の痛みを描いているのです。

自分自身の身に起きた出来事の証言ならば、その証言活動を続けるか、止めるか、自分の意志で決めることができます。『ナム』のハルモニたちは自分自身の意志で、「証言」者／表現者となりました。それが、日本の政治家、文化人、大学教授らによってセカンドレイプともいえるようなバッシングに遭ったわけです。しかしその中で彼女たちは証言者／表現者としてのありようを自ら選び取っていました。まさに『ナムの家』第2作目は、ハルモニたち自身の呼びかけで制作されました。

それに対してナディアは、まさに同胞が現在進行形で被っている苦難の証言者としての責務、自分はそこから抜け出たからこそ今なおその場にとどまる同胞のために放棄できない責務、というものを彼女は負っています。

私は「ワタン」（英：Homeland）をテーマに考えておりまして、この「ワタン」とジェンダー／セクシュアリティの観点から考えてみます。すると、性暴力被害者というのはそれが被害者であるにもかかわらずスティグマ（烙印）となってしまう。また、『ナム』にも出てくる証言ですが、故郷に帰っても受け入れられなかった、というワタン／共同体による拒絶があります。また、『ナム』のハルモニたちが解放後、半世紀近くにわたり社会の中で生きてくる中で被った苦難というものがありました。しかしあれから30年たった2021年においては、彼女たちの証言が韓国における#Me too運動の原動力のひとつになっていることは間違いないと思います。

ヤジーディー共同体も同じです。先立って行われた『The Last Girl』の読書会では性被害に遭ったことで共同体に帰れなくなった女性の証言がありました。すると、ナディアの証言活動というのは、長い目で見ればヤジーディー社会の価値変容を求める営為でもあるわけです。『ナム』のハルモニたちはワタンの中で生き、そこで闘い、その中で家族を持ったものもいます。それに対してナディアは、本作品のラストシーンが描いていたように、故郷は破壊され、村は廃墟となり、共同体は離散を強いられました。ナディア自身は異郷の地にあって、ワタンから根を折られた孤独のなかで活動しています。共同体再建という責務まで、彼女は担うことが期待されている、ということが描かれています。



これは本作DVDのジャケットです。タイトルの下には「2018年ノーベル平和賞 国際親善大使 ナディア・ムラドの決意と行動」というキャッチコピーが書かれています。でもこの映画を観ると、この映画が描いているのはナディアの孤独と痛みなのではないかと痛切に感じます。私たちがこの映画を観て考えなくてはいけないのは、その痛みをもたらしているのは一体何なのか？そして、この映画がナディアの孤独と痛みを描いているとするならば、私たちはどのようにそれに応答するのか、ということが問われているのではないかと思いました。私の話は以上です。

後藤：岡さんありがとうございました。ナディアの孤独と痛みをもたらしているのは何なのか、大変重要な問い合わせていただきました。後ほどこれも深めていけるかなと思っています。

では、最後のパネラー、小手川正二郎さんにお願いしております。今回、「「ナディア」を観る私たち—現象学からのアプローチ」というタイトルをいただいております。

小手川さんは國學院大学文学部哲学科にお勤めで、ご専門はフランス近現代哲学、現象学。ご著書に『現実を解きほぐすための哲学』、『甦るレヴィナス』、『フェミニスト現象学入門』などがあります。今日は「「ナディア」を観る私たち—現象学からのアプローチ」として、先のお二人とは異なる切り口から、お話しいただければと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

小手川：よろしくお願ひいたします。こんにちは。鳥山先生と岡先生の後をうけて、話をさせて頂くというのを恐れおおいのですが、本日は「ナディアを観る私たち」という題目でお話させて頂けたらと思います。

私は、哲学を専門としておりまして、とりわけ現象学という専門領域から、性差や人種、難民といった主題について研究しております。現象学というのは聞きなれない方も多いと思いますが、シンプルに言うと、私たちの日常的な経験に立ち戻り、それを経験している人の観点にあえてとどまつて、様々な事柄を記述して分析する手法です。

本日は、『ナディアの誓い』を日本で観ている私たちの観点から考察してみたいのですが、ここで「私たち」というのは、私も含め映画をご覧になった皆さんのことです。正座をして観たという方もおられるかもしれません、きっと、暖房がきいたお宅などで、くつろいで、コーヒーでもすすりながら、ご覧になっていたのではないでしょうか。何が言いたいか、というと、日本にいる「私たち」と、ナディアや、現に難民キャンプで生きている人々との間には大きな隔たりがある、ということです。先進国に住む私たちの目からすると、ナディアが受けたあまりにも過酷な経験は、あたかも自分たちとは縁もゆかりもない「異世界」で起きたかのように感じてしまうかもしれません。そのように感じると、私たちはややもすると、加害者を悪魔のように描いたり、逆にナディアを悲劇のヒロインとして見てしまいがちです。そうして、この悲劇を観劇する「私たち」は、不正を糾弾する正義の側に身を置いていると思い込んだり、ヒロインの勇気に感動して涙したり、あるいは哲学者でよくありがちなのは、この悲劇を「考え続ける責任がある」などと言って、終わってしまいやすい。

映画を見て私が感じたのは、この映画は、まさにこうした「悲劇を享受する私たち」を問いかねる所ではないか、ということです。それは映画冒頭のスマホでナディアを映そうとする人たちと彼らに困惑するナディアの対比という形で象徴されているように思います。つまりナディアの姿を写真に撮ったりメディアでとりあげ、悲劇のヒロインとして観て享受してしまう、そういう一方的な関係を問いかねているのではないか、ということです。この問いかねるために必要なのは、何よりも、ナディアが生きる世界と私たちが生きる世界をつなぎ直すことだと思います。このことを皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

映画では、いわゆる「国際社会」から見た悲劇のヒロインとしてのナディアと、ナディア自身の語りとのギャップが鮮やかに描かれています。例えば、彼女は「活動家」と呼ばれるに違和感を覚え、自分をあくまで「難民」の一人だと言います。また、安保理での発言の際、彼女には「あなたの勇気に感謝する」といった言葉が投げかけられ、「立派な人」だと言われますが、ナディア自身は「自分が立派だとは思えない」と吐露しています。さらに、美容院で散髪した後、「モデルか女優みたい」と言われ、実際に、彼女の発言を国連で取り上げてもらい、ISの被害者の代表として選ばれるために、ある種の「オーディション」を受けさせられるわけです。これに対して、ナディア自身は美容院を開くのが夢であり、ISの被害者として有名になりたくはなかったと言います。

映画ではマスメディアからナディアに繰り返し投げつけられる問いかねに違和感を抱えるナディアも描かれています。メディアからは、例えば「ISに何をされたのか?」「所有物のように扱われてどんな気持ちだったか?」「死にたいと思ったか?」「加害者をどうしてやりたい?」といったことが繰り返し尋ねられます。ナディアは、「あなたはどうしたい?」とか「有名になって変わったか?」といったことは聞かれたくないと言います。むしろ自分が聞いてほしいのは、「被害者たちはどんな運命をたどったのか?」「どれくらいの若い人たちが苦しい状況にあるのか?」「難民キャンプの状況はどうなっているのか?」「女性が犠牲にならないために、何をすべきか?」といったことなのだと。

ナディアに感動する先進国の人々とナディア自身がふとしたときに発する言葉のコントラストにもドキッときせられます。例えば、カナダの議員の母親が「ナディアを自分の娘だと思っている・一緒に住もう」と言ったというシーンがあります。こういうシーンを観ると、私自身も、ドキュメンタリー映画を観たときには涙が出るほど感動しても、映画館を出たら日常に戻って、例えば妻に「夕飯どうする?」とか聞いてしまう自分を思い出さずにはいられません。これに対して、先進国で（ある種過剰に）歓迎される際にナディアは、しばしば居心地が悪そうな表情を浮かべます。例えば、カナダ議会の議長席に座って写真を撮られるナディアは典型的なシーンではないかと思います。また、カナダの議事

堂前でぎわう家族連れをみて、ぼそっと「イラクなら自爆テロが起こる」と言う。こうしたシーンを観ると、彼女がどのような日常を生きているのかをさまざまと感じさせられます。

今見たようなギャップと共に、映画では、ヒロインやスーパーヒーローとは対極的な、ナディアたちの日常的な姿や葛藤も描かれています。例えば、カナダのヤジーディー教徒たちの集まりに参加する前、車の中でついあくびをしてしまい、撮影者に笑みを浮かべるナディアの姿は印象的でした。こうした姿を見せたり、その映像を映画のなかで使用したりすることは、撮影者との信頼関係があるからこそできることなのではないかと思います。また難民キャンプを訪れた際、ヤズダのメンバーたちが難民となった人々に「どうしたらいい?」と問われ、「耐えてほしい」と言うしかなく、基金をつくって難民に配分するといったことを考えるも止められて、無力感にさいなまれる姿も描かれていました。さらに、国際社会に「言葉ではなく行動を」示してもらうために、ナディア達にもある種の「政治的」言動が求められるという事実は、国連で「ナディアに〔彼女を難民として受け入れた〕ドイツ国民への感謝を述べさせなさい」とムラドさんが言われる場面などに見てとることができます。

こうした姿を見て、私たちに突きつけられる問いは、なぜ「国際社会」や人々がISによるヤジーディー教徒のジェノサイドに関心を向けるために、ナディアが「繰り返し」語らねばならないのか?ということだと思います。逆に言えば、なぜ何度も何度も、語られ訴えられなければ、人々は関心を向けようとしないのか、ということです。テレビ局で涙ながらに話したナディアに対して、質問者は「彼女が語ることが重要だから」と言います。しかし、なぜ彼女が、自身の悲惨な経験のある意味でセンセーショナルな形で話さなければ、人々は気づかないのか。こうした問いを真剣に考えてみる必要があるのではないかでしょうか。

この問いを考えるにあたって、私にヒントを与えてくれたのが、岡真理先生の著作『ナツメヤシの木陰で』(青土社、2006年)に収録されている「知のプロヴィンシャリズムを越えて」という論考です。そのエピローグで、カナファーニーの短編「ガザからの手紙」(1958年)のなかの、幼い兄弟をかばつて脚をうしなったパレスチナの女性ナディヤの話が出てきます。この短編を学生時代に訳された岡先生が、当初は、「うしなわれたナディヤの脚」がもつ意味を探るのは、パレスチナ人の問題であると思っていたそうです。しかし、あるシンポで、80年代の韓国の民主化運動に携われた文富軾(ムンブシク)さんが「ナディヤの喪われた脚とは光州(クワンジュ)である」と言うのを聞いて、次のように述べられています。「ナディヤの喪われた脚としての光州、それは、文さんがそこにとどまり、その意味を探すべくつねに回帰していくもの、そのようなものとしてある。だとすれば、それはまた、私自身がそこにとどまり、その意味を探すべくつねにたちかえりゆくべきなにものかであるのではないか」(144頁)と。岡先生に曲解していると叱られるかもしれません、この一節を読んだときに、私は、私たちがナディア・ムラドさんの問い合わせに応答することができるしたら、それは映画を観た私たち一人ひとりが異なる仕方で受け取った「その意味を探すべくつねにたちかえりゆくべきなにものか」を探求することによってではないかと思ったのです。

おそらく、映画をご覧になった人がそれぞれ異なるシーンに心動かされたり、引っかかりを覚えたりしたのではないかと思います。こうした接点を手掛かりにして、自分の生き方や価値観を問い合わせていくことが可能なのではないでしょうか。例えば、男性として生きてきた私は、ナディアの「女性が犠牲にならないために何をすべき?」という問いに、日本において女性がおかれている立場や、それに疑問を抱かずに生きてきた自分自身のあり方を問わざるをえません。例えば、「性奴隸」、「強姦」というワードが男性たちによって欲情をそそるものとして消費されてきたし、そうした消費をコンビニの成人向け雑誌置き場等で今もなお許容しているという事実があります。あるいは、性犯罪の被害女性が好奇

や蔑みに満ちたまなざしを受けることも日本の至るところでまだ見られます。女性に対するこうしたまなざしや見方は、私たちが生きる世界とナディアの生きる世界は「地続き」であることを思い出させてくれます。そして、こうした現状に向き合って、それを変革しようとすることは、ナディアの問いに対する一つの応答といえるのではないかでしょうか。

あるいは、難民について関心がある方は、難民キャンプのシーンや彼女が自分を「活動家」ではなく、「難民」であると言うことの意味を考えるかもしれません。日本国内に目を向ければ、ちょうど昨日、出入国管理及び難民認定法の一部を改正する法律案の閣議決定がなされました。これは、入管施設への長期収容という問題への対処という側面もありますが、難民申請者の送還につながりかねない点など、様々な問題点が指摘されています。大学にいつもゲスト講師に来てくださっている、難民支援協会のHPにそれらの問題点が指摘されています。オリンピックをめぐる騒動の裏で報道されにくい、難民をめぐる国内のこうした問題を注視し、リアクションしていくこともまた、ナディアからの問い合わせに対する一つの応答となると私は思います。以上です、ありがとうございました。

後藤：小手川さんありがとうございました。なぜ人々が関心を向けるために彼女が繰り返し語らなければならぬのかというところ、先ほどの岡さんのナディアの孤独と痛みというところにつながると思いました。また、具体的な応答についてもお話しいただきありがとうございました。

それではみなさんのはうからご質問やコメントをお受けしたいと思います。みなさんと考えていただいている隙に、濱中さんにもう一度登場していただいて、先ほど岡さんのお話の中で、撮影者が何を考えていたのかという話、あるいは小手川さんのお話の中でメディアの役割というものがありましたが（そもそもこの映画自体がメディアになっているわけですが）、監督はどういう意図でこの映画を作ったのかという点を濱中さんに教えていただければと思います。よろしくお願ひいたします。

濱中：監督のボンバッハ氏についてはいくつかのインタビュー記事があります。インタビューの中でボ

ンバッハ氏はトラウマにまつわる物語を、メディアがどのように形作り提示しているのかに関心があつたとお話ししています。例えば、ジャーナリストがナディアさんに取材をするときに彼女に、彼女が訴えかけているところの問題の解決策を尋ねるのではなく、「どのようにレイプされたのか？」「どれくらいの期間、監禁されていたか？」といった質問をするのはなぜか、なぜそういうことを知る必要性があるのか、と感じていたと話しています。すなわち、トラウマにまつわる物語が語られる際の、メディアによる問題形成の仕方に関する強い意識があるということが、インタビュー記事を通じて伝わってきます。また、語り手あるいは情報の送り手のほうに関心があるとも明らかにしています。

加えて、映画がどのように人々に捉えられるかを意識したとも述べていて、とくに「中東出身の女性」によって語られる悲劇的な出来事、それというのは、ある種頻繁に見聞きする話である、そうした状況がある中で、ナディアさんが経験したようなことが世界各地で繰り返されていること、それがどれほど問題であるのか、ということを訴えかけたかったのだとボンバッハ氏は話しています。

後藤：濱中さんありがとうございました。ということは、On her shouldersというタイトルに見られるように、意図的に、今三人のパネリストが言ってくださったようにメディアの役割に批判的な思いも込

めて作られたということですね。

濱中：はい、そうだと思います。ナディアさんが、メディアや国連の人々の関心をひくような、あるいはそれらが求める「被害者像」にフィットさせていく様子、そうしたものが作品中で見られたのではないかと思います。それを映し出すことが、この監督の意図したところのものだったのではないかと思いました。

後藤：ありがとうございました。それではパネリストのみなさんのほうで何か付け加えたいことなどありましたらお願いします。

岡：よろしいでしょうか。小手川さん、カナファーニーの作品に関してご紹介いただきありがとうございます。引用してくださった部分に関して、どういったことが書かれているのかについてここでご紹介したいと思います。

作品のラスト近くに、このようにあります。「ナディヤは逃げようと思えば逃げることができたはずだ。逃げて脚を喪わずにすんだはずだ。だが、彼女はそうしなかった。なぜ。」と。「その意味を我々は探さなくてはいけないのだ、ここガザで。」という結びでこの作品は終わります。先ほどの私の話に引きつけて言いますと、「彼女は放棄できない責務を負っている」という言い方をしてしまいましたが、ナディアはそういうのをすべてやめて逃げようと思えば逃げられるはずだけれども、彼女はそのすべてを引き受けてその痛みと悲しみを堪えながらこの活動をしているとすれば、一体それはなぜなのか？というのが、私たちに問われていることだというふうに思いました。

それと、先ほどは『ナムの家』と比べながら『ナディアの誓い』の違うところについて語ってきましたが、それをふまえて考えてみると、どちらの映画も監督と語り手（ハルモニやナディア）との間に極めて親密な、信頼できる関係性を結ぶことで彼女たちの素の状態が出てくる、その時に彼女たちが訴えたいもの、想いを描いているという点では共通しているなと思いました。

後藤：はい、ありがとうございました。鳥山さん、どうぞ。

鳥山：今の岡さんの説明に対して、監督との間の信頼関係があつて成り立っている作品だと言われましたが、その「信頼」とは何でしょうか。ついつい日常生活でも使いがちな言葉ではありますが、どのようなものを「信頼」と捉えることができるでしょうか。一方通行の、あるいは共同幻想ということはありませんでしょうか。

岡：逆に言えば、そういう自分を出せる環境を作れた（『ナムの家』の場合、心を閉ざしていたハルモニたちがビョン・ヨンジュ監督にそうした想いを伝えられるようになるまである程度の時間がかかった）。こうした言葉を掬い上げることができた、こうしたところに私はそれ（信頼）を感じました。

鳥山：つまりそれは、彼女たち自身が、これは社会的に求められているものではないかもしれないけれど、与えられた役割を果たすだけではない、そこからずれたものも含めて出している、と言い換えてもい

いですか？

岡：うーん、どうでしょう。それこそ小手川さんのあくびのお話ではないけれども、無防備な自分というものかもしれません。それを言葉で表現すると、今鳥山さんが仰ったものになるのかな。

鳥山：近いですが、「無防備」って難しいですよね。逆に私が、岡さんが仰ったことを自分の報告にひき寄せて考えたのは、求められている姿だけではないものも共有できるという安心感、そこなのかなと思いました。

岡：映画の中でナディア自身が料理をする場面。そこではクルド語で冗談を言い合っていました。その瞬間にナディア自身が、メディアあるいは社会が彼女自身に求めるものではない一瞬がそこで切り取られている、ということです。

後藤：小手川さん、何かあれば。

小手川：今、鳥山先生と岡先生が仰ったことには本当にいろいろと考えさせられました。特に「信頼関係とは何か？」を問うことは重要なと思いました。

一つ付け加えるとすれば、ナディアさんは『The Last Girl』で描かれていたように、彼女がISの手から逃れる最中に彼女の発言が政治的に切り取られて利用されるという目に遭っています。したがって彼女自身、自分の発言が政治的に利用されることに対して敏感であると思います。それと同時に、彼女が公でしゃべっている際には、そうした政治性というものもかなり考えられていると思います。その一方で、映画では、岡先生が仰った無防備というか素に近い自分みたいなものも時々垣間見られるというのも印象的だったなど。それさえも作られているかはわかりませんが。

鳥山：そうしたら「素」って何ですかって聞きたいところなんですが、コメントが来ているのでやめます。

後藤：それではここで、いただいたコメントを読ませていただきます。「いろんなことを考えさせられたのでなかなかレスポンスが難しい。岡さんのご発表から考えたのは、証言者の傍にいる男性たちも含めてワタンがある。ナディアの傍らにいたムラードやアフマドの姿を私はとても好意的に受け止めましたが、ハルモニたちを日本で受け止めようとしない人々は、ハルモニたちのワタンを所有している人々にも反発しているのかな、と思いました。鳥山さんと小手川さんに対しては、今日のメディアが巨大でとても複雑であることの効用と武器となるような力を持っていることをどう思いますか。メディアなしにナディアさんにただただ会いたいですか」と。面白い質問ありがとうございます。では、鳥山さん。さっき「会いたい！」と仰っていましたけれども。

鳥山：はい、会いたいです。そもそもどういう人間として会いたいか？ということをお話しました。私の場合は、そもそも会えないほうのもどかしさを会いたいからこそ感じるというところであり、その背景に何か重要なことがあるわけではないです。

後藤：小手川さん、もしメディアについて何か付け加えることがありましたら。

小手川：メディアはたしかに複雑で難しいと思います。この映画は、単にメディア批判というだけの映画ではないと思います。ナディアさんたち自身もメディアを用いて社会に訴えかけているというところがあり、そこは完全に否定できません。ナディアさんもメディアに質問されたくないと言っているのではなく、むしろ、レイプされたことに対して質問されることは仕方がないというようなことを言っています。なぜかというと、それは事実を正確に知ってもらう必要があるからでしょう。ただ、それと同時に、その時になされている質問が聞いてほしくないものだ、とも言っています。その時にナディア自身が聞いてほしいと思う質問があり、それはメディアの人と共有して一緒に考えていくべきだ、と彼女自身も思っているのではないかと感じます。

これとは直接関係がありませんが、個人的には、映画におけるアマル・クルーニーさんの位置付けはどうなっているのか、教えていただきたいです。

後藤：ありがとうございました。アマル・クルーニーさんが国連のスピーチの時に「私は誇らしいわけではない」「私は恥ずかしい」と仰っていたところも印象深いシーンだなと思いました。彼女自身が、ナディアさんを受け止める国際社会を代表して語っている、というふうに表現されていたのかなと今思い出しました。

今、チャットのほうに「小手川先生、岡先生のお話をうかがって、パク・スナム監督の『沈黙：立ち上がる慰安婦』を思い出しました。やはり女性の監督であり在日のパク監督は、彼女たちは私であったかもしれないという想いでハルモニたちを尊重しながら撮り続けても、現在もハルモニたちとの関係を続けてきていることを思います。ナディアの誓いは自分だったかもしれない、日本にいるクルドの方々も近く感じているように思います」というコメントをいただきました。

個人的には、ナディアさんがヤジーディーを代表しているという発言の時と、私を最後にするためにという性暴力被害者全体を代表している時があり、そこに若干の、彼女自身の「ゆれ」があるのかなと思いました。そのあたり、いかがでしょうか。コミュニティに籠る時と、そうではなくて地球規模で考えるべきだ、という時があったように思いました。

岡：今日の映画も、時系列的にどのように編集されているか分からぬ部分がありますよね。英語でやり取りしている場面がありましたが、それは彼女がこうして活動していくなかで英語が上達したのかもしれません。彼女自身が証言活動を始めた最初の時期とそれから現在に至るまでには彼女の思想自体も深まつたりしたはずだと思いますが、その点に関してはこの映画を観るだけではわかりません。つまり、それが彼女の「ゆれ」なのか、あるいは「深まり」なのか、というのはこの映画を観た限りではわからぬと思いました。

後藤：なるほど、ありがとうございます。今コメントがありました。「アマル・クルーニーさんはレバノン出身で父方はスンニ派、母方はたしかドゥルーズか何かだったと思います。ですから、彼女の発言の『誇りに思えない』というのは中東で起きたこと、イスラームの名のもとに行われた暴力だからという意味もあったかもしれない」と推測します。」なるほど、そういう見方もできるのですね。

私のほうからみなさんに伺いたかったのは、小手川さんはナディアさんへの応答として具体的に二つの事例を挙げてくださいましたが、岡さんも鳥山さんも応答が必要だと仰っていました。小手川さんは私たちに対して「不正の糾弾」「加害者の悪魔化」「一時の感動」「考え続ける責任」という

言葉でこの映画会を終わらせていいのかということを仰ってくださいました。では、私たちの中でどんな方向で進めばいいのかというところのお考えを伺いたいと思います。いかがでしょうか。

鳥山：本日は国連安保理決議1325の話をしましたが、そこに至るまでの流れも少しお示ししました。というのは、こうした国際決議や大きく言えば価値観のようなものは、一度決めたらそこで終わりではなく、それが国際的に認知されて実践されて、可能な限り生活の隅々まで行きわたることが意図されているのだと思います。ですから、国連安保理決議1325があるからいいではないか、という話ではなく、それはいろんなものの積み上げの基に行われているのであり、もしも私たち自身が日々の尊重を止めてしまったら意味のないものになりえると思います。ゆえに、その重要性を認知して（私はオリエンタリズム的なものを感じ批判しましたが、これは学者の仕事ということにしておいて）、もっとそれをより多くの人々の痛みを掬えるものの形にしていくにはどうすればよいのかについて考えて運動していくことが重要であると思います。

後藤：ありがとうございます。岡さん、是非お願ひします。

岡：いろんな問題が描かれていると思うので、それに対して私たちが応答しなければいけない問題はたくさんあります。例えば、この映画ではナディアが訴えていることやその姿を通してこの作品が描いていることに対してどう応答するかということもありますが、同時に、国際社会や国連が、先ほど小手川さんが示してくださいましたように、オーディションで選んでいるということ。ナディアは選ばれた、でもその時にそこで選ばれずに取り上げられなかつたものがいるということも、この映画では描いています。最初に鳥山さんが仰ったように、性暴力だけではないが、しかし性暴力の被害者であったがゆえに注目された、ということ。国際社会がどうにかしなければ解決しないという意味では、パレスチナも同様です。しかし、ナディアのようなアイコンがいない。だから同じような状況が何十年も続いている。そのことの問題もあるわけです。

この映画を観ることによって考えさせられることは多々あります。例えばマララ・ユスフザイさんの場合も、彼女というアイコンができることによってそうした問題に注目が集まる。そのアイコンにされてしまうことの苦しみもこの映画は描いていますが、そうしたアイコンすらいない問題は一体どうなるのか、ということも考えなくてはいけないと思います。

ナディアの言葉にあった「不正が正しく裁かれるまでは自分が依然として奴隸であると感じる」ということについて。おそらくこれはナディアだけでなく、そうした状況に置かれたものたちだけではなく、不正が不正として正しく裁かれるまでは自分の尊厳が回復されないという想いでいる人たちは大勢います。ナディアの場合はISという領域国家ではない集団が行ったものだから国際社会がそれを裁かなくてはいけません。しかし、例えば旧日本軍の性奴隸の場合、明らかに日本という国家がありますが、依然として日本は正しく裁くという方向性ではないほうに向かい、とにかく被害者の女性たちが亡くなつて時間切れになるのを待っているという状況であるとすれば、この時に、国家に対して責任を持っている者たちが何をすべきであるかということは自ずと見えてくると思いました。

後藤：ありがとうございました。では、このあたりで今日の『ナディアの誓い On her Shoulders』は締めさせていただきます。ご登壇くださいました濱中さん、鳥山さん、岡さん、小手川さん、本当にありがとうございました。

簡単に締めの言葉を言わせていただければと思います。この企画が始まって以来、私自身はどうやつ

て応答できるのだろうかと考えてきました。そのヒントをいただいたのが、2021年1月28日に開催された『人類と病』の著者、詫摩佳代さんのセミナー「新型コロナと国際政治」（ASNET主催）でした。世界保健機関（WHO）の指揮系統の問題を指摘されていて、国際社会がどのように対応するかが重要だというお話をされました。

質疑の時間に、「世界保健機関の仕組みをすぐに変えることができるような力をもたない私たちは、新型コロナの問題をめぐっていったい何をすることができるのか」という問い合わせを投げかけてみました。すると、次のようなお答えをいただけました。パンデミックを収束させるためには、先進国だけで対策するのではなく、世界全体に広く対策を浸透させることが重要という研究成果がある。自分の国だけ、地域だけ、何とかすればよいという考え方では、パンデミックはなくならない。そうした広い視野を持つことが、私たちにできることである、と。世界全体を変えていく必要があるということを意識することが、私たちにできることだというのです。これを私なりに応用するところなります。「戦時下にせよ、日常にせよ、性暴力も、暴力も、なくしたい。そう願うのであれば、自分たちの周り（組織や社会）でなくなるよう取り組むのではなく、世界のあらゆる場所について取り組む必要がある。」そうした認識を持つことで、世界をよい方向へ変えていくことができるのではないかと思いました。

本日はご参加どうもありがとうございました。